

念佛爲先の解釈に就いて

山

口

理

選採集の巻頭の掲げられたる文前標字の十四字、南無阿弥陀仏・往生之業念仏爲先に就いて念仏門の代表的三派たる鎮西、西山、真宗が如何に之を解釈したかを冠てみる事にする。

(一) 正流

選採集の巻頭の十四字は本文十六章段の所詮の要旨が、口林の念仏にあることを示さむとしているものであると云う解釈に依いては、古来何等の動きがないのである。鎮西上人は徹選採巻上に於て此の十四字を文前に掲げられたのは、結前生後の為であると判釈を下していられる。その結前とは直ぐ前に置かれたる選採本願念仏衆という本書の題号を解釈するに当り、鎮西上人は之を念仏という諸師所立、指導所立、然師所立の三義あることを示される為に、此の三義共に林名の念仏たる争を結んで、南無阿弥陀仏等の十四字を掲げられたものとするのである。その生後とは以下本文に於て明示所の一々の章段、亦皆林名の義たることを示さんとするもの

のである。

念仏為先の為先という文字は、往生の業としての諸行と念仏とを対峙せしめて、どちらを先にするかという時間的前後を意味するようであるが、我が正統に於ける解釈は為先とは肝要の義であるとして、別段に時間的な意味を有するものでないとしている。即ち、徹選扶卷上には往生極樂の急には口称の念仏をもつて才一の行とする意味に於て、念仏為先と言つたのであるとし、決疑鈔才一には、往生の中には念仏を以て最要とする意味に於て、先と言つたのであつて、時の前後を言つたのではないと、はつきり断つてゐる。これは恐らく當時の西山義の主張に對せられたものと思ふ。西山義にあつては次に述べるが、鑑西に於ては為先をもつて諸行と念仏とを對峙せしめて、先づ念仏往生を説き、後に諸行往生を許すものと解釈し、その間に時の前後を意味せる解釈を加ふるが故である。

(二) 西山

西山教義の特長は念仏一類往生を説くにあるから、諸行と念仏とを對峙して、その前後を語る如き事は、本来はその必要を認めないのである。他流鑑西の義にあつては、諸行と念仏との二類往生を説くから、先づ念仏往生を説き、後には諸行往生をも許し、その間自らの前後を意味するようになるのであるとしている。而し自流西山の義にあつては諸行と念仏とを對峙せしめる時に、念仏を先にし、諸行を次にするといふ意味がないものでもない。これ flows、助正、傍正の三重の義に依るからである。此の意味を行風の選扶集私記才一に次の如く述べてい

る。

「他流、兼念仏為先^ト者、後^ハ諸行往生^{トイフ}意^ヲ料簡^ス也。乃至 就^ニ今^ノ家^ノ裁^ハ吾^レ、自家之裁^ニ學^ブ、斷^ニ無^ク阿^ノ洩^ノ陀^ノ仏^ト云^ハ往生之業^ニ念^ハ仏^ヲ為^ス先^ト云^ハ下^ニ。諸行念^ハ仏^ヲ對^シ意^ヲ次^ニ意^ヲ可有^ク、就^ニ諸行有^ク三重^ノ裁^ハ政^ニ、乃至 三重^ノ只^ニ諸行^ヲ為^ス次^ニ念^ハ仏^ヲ為^ス本^ト念^ハ仏^ヲ先^ト謂^フ意^ニ也」。

(三) 眞宗

眞宗所伝の選扶集にあつては、往生の業念仏為本とあつたと伝え、為先の文字を用いないが、從つて時の前後を意味することがない。本派道隱（文化年間の人）の選扶集要録卷一上には、念仏為本の文字を解説するに、所引選扶の意より之を本意、本類の意味に解説し、枝末に相對した根本の意味でないとしてゐるが、衆生の往生の因果より論ずれば、諸行と念仏とを對立せしめ、寔立の義により、餘行の末を棄て、念仏の本を立てると言つて、本末の意味に解説してゐる。